複式学級指導充実のために

～平成29年度複式教育推進指定校事業リーフレット～

複式学級は、どんな学級か知っていますか？

児童又は生徒の数が著しく少ない場合、数学年の児童又は生徒を1学級に編制することができます。このような学級を複式学級と言います。

法的根拠：公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（以下「標準法」という）

1学級の児童又は生徒の数の基準は、標準法で示す数を標準として、都道府県の教育委員会が定めることとされ、島根県教育委員会では、独自に以下のようにしています。

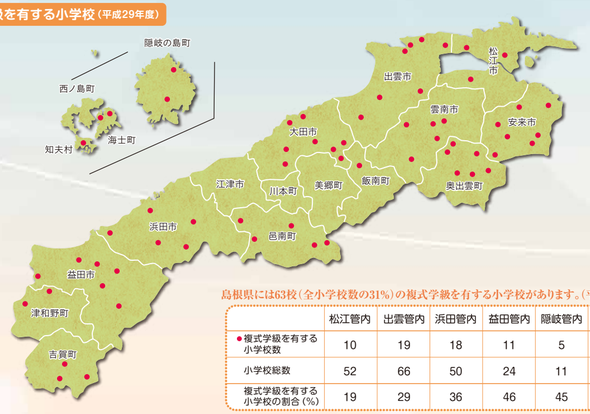
中学校‥‥ 特別支援学級を除き、法律で示された基準の生徒数8人以下であってもすべて「単式学級」として編制する。（島根県独自）

小学校‥‥ 複式学級の児童数は16人（第1学年を含む学級は8人）すべて1・2年、3・4年、5・6年の組み合わせで編制する。（島根県独自）

島根県の複式学級を有する小学校の状況は、この10年で大きく変化しています

昭和50年代後半以降、島根県の複式学級を有する小学校数は、ほぼ90～100校の間で安定していました。しかし、ここ約10年で市町村立小学校は約50校、そのうち複式学級を有する小学校数は20校近く減少しています。

複式学級を有する小学校（平成29年度）



島根県には63校（全小学校数の31%）の複式学級を有する小学校があります。（平成29年度）

	松江管内	出雲管内	浜田管内	益田管内	隠岐管内	合　計
●複式学級を有する小学校数	10	19	18	11	5	63
小学校総数	52	66	50	24	11	203
複式学級を有する小学校の割合（%）	19	29	36	46	45	31

各指導類型の長所・短所をふまえて教育課程の編成をします

これまで主流であったA・B年度方式と推進指定校で実践された学年別指導のそれぞれの長所と短所は、次のとおりです。

A・B年度方式

長所

- 異学年による多くの人数で学ぶことで、多様な見方や考え方が出る可能性が大きい。
- 個に応じた指導をする時間を生み出しやすい。
- 授業の準備等の教員の負担が少ない。

短所

- 系統的な内容の指導、特に技術的な面の指導が難しい。
- 下学年の児童の能力差や経験差が埋められない場合が多い。
- 転出入児童に対する学年を超えた内容についての未学習への対応が必要である。

学年別指導

長所

- 通常のカリキュラムで学習できるので、教科の系統性をふまえた指導ができる。
- 転出入児童に対する学年を超えた内容についての未学習への対応の必要がない。
- 特に学年による差の大きい1・2年生において指導がしやすい。

短所

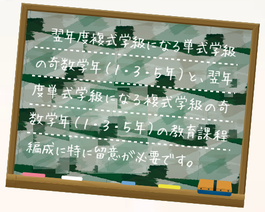
- 直接指導と間接指導を組み合わせた指導が必要となり、指導が複雑で難しい。
- 2学年分の教材研究や学習の準備が必要となり、教員の負担が増す。

したがって、子どもたちや学級、地域の実態を把握し、各指導類型の長所、短所をふまえたうえで年間指導計画を作成し、子どもたちの成長につながる教育課程を編成することが求められます。

教育課程の編成にあたっては、平成28年3月発行の「複式学級指導の手引き（平成27年度改訂版）」並びに教育用ポータルサイトに掲載している同手引き（平成29年度一部改訂）を参考にしてください。

単式学級には学年別の順序によらない教育課程編成は認められていません

～単式から複式へ、複式から単式へ移行する学級における教育課程編成に留意を～



複式学級においては、特例として学年別の順序によらない教育課程編成が認められています。一方、単式学級又は複式学級において学年別指導の教育課程を編成する場合には、この特例は認められておらず、小学校学習指導要領に示されている当該学年の目標及び内容で学習するよう教育課程を編成しなければなりません。

詳しくは、平成29年12月6日付け島教指第921号「複式学級を有する小学校の教育課程編成について（通知）」を参照していただくとともに、不明な点は学校を所管する各市町村教育委員会に問い合わせてください。

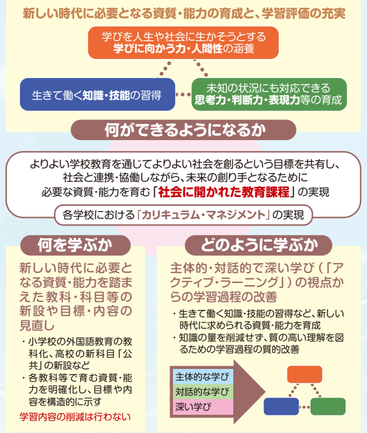
～複式学級の子どもたちから「学びかた」を発信！「主体的・対話的で深い学び」が実現する授業づくりを～

“複式学級で（学年別の）授業をする”となると、その経験をもっていない先生は戸惑いを感じられるのではないでしょうか。「違う学年を同じ時間に教える」ということは、単式学級での一般的な授業の倍の手間がかかると感じられがちです。

そのような先生方に、ぜひ複式学級で学んでいる子どもたちの姿を見ていただきたいと思います。学年別指導では、授業中に先生がずっとは自分たちと一緒にいることができないことを自覚している子どもたちの主体的な学びが繰り広げられ、先生が両学年を見守りながら指導されている様子に感心されることでしょう。

学年別指導では、どうしても学年別交互に指導することになります。その際に、直接指導が必要な場面をどのように「ずらし」て「わたり」を行うか、そして、間接指導の場面でいかに子どもたちが主体となり、自分で考え、友達との対話を通して考えを広げたり深めたりしていくか、などといった展開計画を考え実践することが必要となってきます。進行役の子どもたちを決めて授業を展開する「ガイド学習」はそのための学習形態の一つとして、複式学級では広く普及しています。

こうした指導のあり方を日々、複式学級の担任は考え、実践しています。これらの実践は、単式学級、複式学級に関わらず「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進めていくうえで、すべての教員にとって、そして子どもたちにとって大切なことです。育成すべき資質・能力を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学び の過程を組み立て、子どもの声で授業をつくっていきましょう。



参照：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）

◆複式学級指導の充実にご活用ください◆

平成26年度から複式学級指導の充実に向けた県内の教員向けの支援として、複式教育総合支援事業を実施しています。本リーフレットで紹介した複式教育推進指定校事業もそのうちの1つです。その他の取組を紹介しますので、各校での複式学級指導の充実に活用してください。

(1)複式学級指導の手引き（平成27年度改訂版）
※平成29年度一部改訂（ポータルサイトに掲載）

(2)複式学級新任担当者研修

初めて複式学級を担当する全ての教員及び希望者を対象に、6月に半日、2学期以後に1日（学校会場）の研修を実施する予定です。

(3)出前講座の実施

島根県教育センターでは、複式教育をテーマにした「出前講座」を実施しています。学年別指導の授業をビデオで視聴するなど、実践的な内容を中心に行っています。

(4)先進地の実践事例紹介（ポータルサイトに掲載）

他県の複式学級の国語・社会・算数・理科の学年別指導の実践事例並びに県内推進指定校の公開授業指導案を掲載していますので参考にしてください。

島根県教育用ポータルサイト　幼稚園/小中学校>教育指導課>学力育成>複式教育

島根県教育委員会　平成30年3月

●複式学級では、どのように授業を行っているのでしょうか？

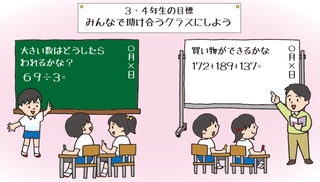
複式学級では、2つの学年の子どもたちが一緒に過ごしています。それでは異学年の子どもたちが、どのようにして同じ学級で学ぶのでしょうか。

複式学級では、特に必要がある場合には、各教科及び道徳科の目標及び内容について学年別の順序によらないことができます。そこで、異学年で一緒に学習できるよう、2年間を区切りとして学習内容を配当し直す同単元同内容による指導（以下**「A･B年度方式」**という）方法があります。島根県下の複式学級では、県独自の学級編制基準により低･中･高の完全複式で安定的に学級が編制されてきました。この2つの異学年間での授業実践については、各学校で豊かな成果の蓄積や継承があり、今日に至っています。

一方で、教科の系統性からA･B年度方式が難しい算数は、異単元の**「学年別指導」**を行ってきました。教員が双方の学年の学習過程の直接指導と間接指導の場面を「ずらし」、それによって両学年間を「わたり」、指導をするのです。

しかし、近年は児童数の減少等により、単式学級から複式学級になったり、欠学年が生じて単式学級になったりすることが多く見られます。このように単式･複式を繰り返す学級では、法令の定めにより、算数以外でも学年や教科の種類によっては**「学年別指導」**による指導が必要となってきています。

学年別指導の必要性が高まっている中で、同時に2つの学年を指導するためには、その指導方法が必要となってきます。



●複式教育推進指定校事業について

平成26年度から、これまで本県で取り上げられることの少なかった国語、社会、理科における効果的な学年別指導のあり方を研究し、成果の普及を図ることを目的として、複式教育推進指定校事業を実施しています。

平成29年度は、複式学級における学年別指導の充実を目指し、算数を新たに対象教科に加えました。

◆平成29年度　複式教育推進指定校事業の取組

●複式学級を有する小学校3校（東部･西部･隠岐）を指定

●内容

- 国語、社会、算数、理科の学年別指導方法についての研究（学校が1教科以上を選択）
- 学年別指導の授業公開
- 先進地視察　等

平成29年度の取組

「安来市立宇賀荘小学校」

1 学校について

●全校児童数　32名

●複式学級　中学年、高学年

●教科　算数

2 研究主題

●「豊かな心をもち、主体的に考え、深め合う子どもの育成」～考えを深める対話力の向上を目指して～

3 年間の取組

(1)先進校視察･研究会参加等

◎高知県高知市立義務教育学校行川学園（全国へき研）
◎高知県中土佐町立大野見小学校（全国へき研）
◎鹿児島大学教育学部附属小学校（九州地区へき研）
◎和歌山大学教育学部附属小学校
◎広島大学附属東雲小学校
◎広島県庄原市立口北小学校（口北学区小中合同教育研究会）
◎広島県庄原市立比和小学校◎益田市立桂平小学校

(2)研究授業

◎5･6年複式算数科訪問指導（7月）
◎3･4年複式算数科訪問指導（9月）◎3･4年複式算数科訪問指導（2月）

4 授業公開：平成30年2月2日（金）

●第3･4学年　●単元　「小数」（3年）　「分数」（4年）

●校外参加者　33名

「益田市立桂平小学校」

1 学校について

●全校児童数　22名

●複式学級　低学年、中学年、高学年

●教科　算数

2 研究主題

●「主体的に他者に関わり、学びを深めることができる子どもの育成」

3 年間の取組

(1)先進校視察･研究会参加等

◎高知県安芸郡馬路村立魚梁瀬小中学校（全国へき研）
◎宮城県石巻市立寄磯小学校（東北地区へき研）
◎吉賀町立朝倉小学校（吉賀町教職員研修会）
◎津和野町立青原小学校
◎大田市立鳥井小学校

(2)研究授業

◎1･2年、3･4年、5･6年複式算数科訪問指導（6月）
◎5･6年複式算数科訪問指導（9月）
◎1･2年、3･4年複式算数科訪問指導（2月）

4 授業公開：平成30年2月9日（金）

●第1･2学年、第3･4学年　●単元　「ずをつかって　かんがえよう」（1年）　「はこの形」（2年）

●校外参加者　24名　「かけ算の筆算を考えよう」（3年）　「分数をくわしく調べよう」（4年）

「隠岐の島町立北小学校」

1 学校について

●全校児童数　39名

●複式学級　中学年、高学年

●教科　国語

2 研究主題

●「主体的に学び、考えを伝え合う子どもの育成」～国語科におけるガイド学習への支援を通して～

3 年間の取組

(1)先進校視察･研究会参加等

◎広島大学附属東雲小学校
◎安来市立宇賀荘小学校

(2)研究授業

◎3･4年、5･6年複式国語科訪問指導（6月）
◎3･4年複式国語科訪問指導（10月）
◎1年国語科研究授業（11月）
◎2年国語科研究授業（12月）
◎5･6年複式国語科訪問指導（1月）

4 授業公開：平成30年1月23日（火）

●第5･6学年　●単元　「想像力のスイッチを入れよう」（5年）

●校外参加者　13名（予定者数20名）　「自然に学ぶ暮らし」（6年）

実践から得られた学年別指導のポイント

●学習の見通しをもたせる工夫をする！

ガイド学習を行ううえで、授業ガイド表を用いて教師と学習リーダー（授業の進行役）で事前に打ち合わせをしました。そして、「問題」「めあて」「見通し」等の板書カードを使用し、だれもが見通しをもって学習に取り組めました。また、単元学習計画表を作成することで、今までの学習を振り返って問題を解いたり、自分から進んで考えたりする姿も見られました。学習の終わりには「学んだこと」をふりかえり、学習リーダーがその計画表に記入することで、継続的、系統的に学習内容の理解を深めていきました。

ガイド学習は、主体的に学ぶための手段の一つです。初期の段階で、焦らず時間をかけて丁寧に身につけさせていきましょう。すると、少しずつ自分たちでできるようになります。学級づくりにもつながります。

学習リーダーを中心に話し合う活動

●「考えさせること」を明確にして展開計画を立てる！

単元を貫く学習課題を設定したことで、毎時間の学習課題や授業の構想を立てやすくなりました。そして、1時間の授業の中で「教えるべきこと」と「考えさせること」を明確にし、直接指導が生かせる課題と児童だけで解決できそうな課題を組み合わせました。これにより、「ずらし」を計画的に設定でき、どこで「わたり」を行うのかを見通すことができました。こうして、児童だけで「考える」時間を設けたことで、教師に頼らず自主的に解決しようとする習慣が身についてきました。話し合い活動では、学習リーダーを中心にして、友だちの考えに質問したり、自分の考えを述べたりする対話により、自分たちで学びを深めていきました。

算数の授業における話し合い活動の充実により、他教科等や学級を越えた集団での話し合い活動の充実を、相乗的に図ることができます。

●「子どもに任せる、やりきらせる」方向で！

基礎的な学び方（学習規律）と基本的な学び方（学習展開）の定着を図り、学習ガイド（授業の進行役）の育成を図りました。そして、同時間接指導を学習の中に位置づけ、状況に合わせたきめ細かな指導ができるようにしました。教師が「待つこと」と「聞くこと」を大切にしたため、児童にも「わかってあげたい。」「助けるのは当たり前。」「みんなで解決しよう。」という風土が育まれてきました。児童は任せられているという自信とやりきったときの満足感とが重なり、他の教科や学校生活でも、より主体的に物事に関わるようになりました。

「教員は全てを教えなければならない」という考え方を変え、時には離れて見守り、必要な時には適切に言葉かけを行う姿勢を大切にしましょう。

自分の言葉と図、式による説明

●授業を進めるうえでの学習環境を整える！

児童の実態や学習内容に合わせてL字型、背中合わせ型など柔軟に座席の並び方を変えました。また、学習の流れを示した学習ガイド小黒板や自分の考えを伝えるホワイトボード、算数コーナー（既習事項の掲示）や具体物･半具体物コーナーの設置など、学習環境を整えました。移動黒板の使用の際はしっかり書くことができるように2枚を確保し、「教師がつくる板書」と「児童がつくる板書」を視点に、学習の跡がしっかり残る板書にしました。

児童が動き出せる環境を整え、機能的な教室づくりを考えてみましょう。主体的な学びを展開させるために、他にも工夫ができそうです。

●年間指導計画において指導事項の焦点化を図る！

国語においても学年別指導を行うことで、学年の発達段階や学習内容の系統性を踏まえた指導ができました。2つの学年の指導事項を把握するために「マトリックス型年間指導計画」を作成し、学習する単元においてどの指導事項を取り上げるのか、それに合う言語活動は何かを年間を通じて明確にしました。また、計画を立てるうえで単元領域を揃えることにより、異学年間で考えの交流を行うことができました。上学年は復習になり、下学年は今後の見通しをもつことができ、学びのつながりに生かすことができました。

年間指導計画や学習指導案、作成した教具やワークシートなどを学校全体で共有し、授業者が効果的かつ効率的に教材研究ができる体制を構築していきましょう。

学習の意欲と見通しをもたせる直接指導

●授業におけるそれぞれの役割を明確にする！

ガイド学習を進めていくうえで、まずは「ガイドの役割（進行の力）」、「フォロワーの役割（協同の力）」、「教師の役割」について明確にしました。そして、役割に応じた「大切にしたい心構え」を児童に示す一方で、教師の構え（指示をできるだけわかりやすくする、児童の進行のじゃまをしない、できるだけ口出しをせずにじっと待つ　など）を共有することができました。これは複式学級だけではなく、単式学級である低学年のうちから、授業を通してガイド学習の指導を行い、複式学級になっても自分たちで主体的に学んでいくための力を育てました。

進行役であるガイドを育てるためには、よきフォロワーを育てることこそが大切です。児童の支え合い学び合う姿を認め、言葉で具体的にほめていきましょう。